
ダンス少女

森下しあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タンス少女

【Nコード】

N3361P

【作者名】

森下しあ

【あらすじ】

春が訪れ、引越してきた少年「片桐祐太」が借りた駅から徒歩1時間以上の格安物件のおんぼろアパートの一室。そこには謎のタンスが置かれていた。その中からこれまた謎の美少女が…。しかしその少女の正体は…。

タンスから女

ーガタンゴトン

景色が流れる。見渡すかぎり家、家、家。午前6時、まだ眠気に包まれている静かな住宅街。今日から俺はここに住むことになった。
…小さな駅が見えてきた。

駅をでて歩くこと約一時間。なんて不便なところ…。そう思いつつもなぜかこの空気が気に入った。しかし、今は春。重い荷物を運びながら一時間も歩けばしだいに汗ばんでくる。早く家に着きたいと思ひ少し足をはやめた。

「ふーっ。着いたー。」

達成感に思わず口に出してしまった。そして、このボロアパートが俺の家だ。形容の仕様のないぐらいホントに古い。全体的に茶色っぽいアパートの鉄の階段を登る。

手前から二番目、どうやらここが俺の部屋らしい。

ーガチャ

さびた金属音がした。鍵はほんとに大丈夫なのかというツツコミをする前にドアノブが取れそうだった。

狭い玄関に、やはり全体的に茶色っぽい部屋。そして、タンス…。

「って、タンス!？」

…少しツツコんでしまった。俺はもしかしてツツコミ属性なのか…。とりあえず、開けてみよう。しかし、このタンスはボロアパートには似合わない立派な造りで、美しく、不思議な感じがした。まるで何かが飛び出してきそうだった。そう思いながら吸い込まれるようにタ

ンスの取っ手を握った。

タンスの引き出しの上から二段目。勢いよくあけると、なんとそこには…

「お、お、おんな！！！」

このアパートに来てから10分も経っていないのに二回も叫んでしまった。隣の住人には変なやつが越してきたと思われていることだろう。とくにこの薄そうな壁、ヤバい。しかし今はそれよりヤバいのだ。もうマジヤバな訳だ。

深呼吸を何回かし、もう一度タンスをみてみた。やはり女の子がいるのは揺るがない事実らしい。よく見ると、この女の子、凄く可愛い。茶色くて長いいかにもサラサラしていそうな髪の毛。顔はきれいに通った鼻筋。人形のように長いまつげ。ぷるっとして形の良い唇。白いきれいな肌に程よく細い腕と足。完璧だといってもいいくらい。しかし…服は、着て、いない…だと！？とりあえず、ここから出してあげよう。…別にいやらしいことを考えている訳じゃない。など自己弁護にはしり、少女をガン見する俺。冷静に考えると…いや、考えなくてもキモイ。だめだ、冷静になるな、俺。

そうすると俺は無意識に少女を持ち上げた。

「うつ…」

なんだこいつ、予想外に重い！！俺はよろめいた。

「ーードンッ

「重っ！！！！」

なんと少女が俺の上に乗る形で倒れてしまった。普通の思春期の男子なら当然ウハウハな状態であろう。しかし俺はそれどころではない。別にホモでもなんでもない。なぜならこいつがとんでもなく重いからだ！とにかく重い。まるで象に踏まれているようだ。本当

に象に踏まれたことはないが。

――ウーン

「生体反応、感知しました。起動準備、開始。10秒前」

ええええ？？？？機械音に無機質なしゃべりかた、もしかしてロボット？なのか？そうだとしたらこの人間離れた重さも説明がつく。しかし、こんなに完璧な容姿をしたロボット、俺は見たことない。現代の科学では決して不可能なはずだ。

「5秒前」と時限爆弾のようにカウントする彼女…。いや、むしろこれは時限爆弾！？俺は必死にどけようとする。しかし全く動こうとしない。

「4」

何もできずに焦る俺。時間だけが過ぎていく。

「3」

「2」

「1」

目をつぶった。もはやこれぐらいしか出来ない。

「…起動、完了しました」

…どうやら爆発はしなかった。目をゆっくりあげると、彼女は動き出した。俺の上からどいてさっき運んできた荷物の上に座った。しかも足を組んで。

「なにしてんの？お前」

容姿からは想像できないような話し方だ。しかも、裸だというのはじらいもしない。機械だからなのか？

「それはこっちの台詞だ。だいたいここは俺の家だし、裸ってなんのプレイだよ！」

「思い切ってつつこんでみた。」

「ふーん、あんたがこの家の主。どう見てもただのガキなんだけど。」

意味分かんことを…。普段は少々のことを許せてしまう俺だがすこしイラッとした。というか、この状況だ。イライラせずに居られるだろうか。俺はふっきた。

「いや、この家の持ち主ってか、借りてるだけで…。というか、どちら様ですか？」

俺がまだ優しく聞いてあげると

「わたし？つーか、人に名前聞く前に自分から名乗ってよね！」

マジでムカつく。女ってみんなこうなのか。とにかく天才的ウザさだ、こいつ。しかし、まだまだ優しく俺は彼女に名乗ってやることにした。

「俺は、片桐祐太だ。お前は？」

「ぷぷぷつ。超平凡な名前。わたしは、タイムワールト時間世界から来たロボットRF-64っていうの。」

…マジでなんなんだこいつは。手の込んだ電波さんなのか？だとしたら痛い、痛すぎる。それにしても一向に恥ずかしがる気配がない。なんか、こっちか恥ずかしくなってくるんだけど。

「あーそうなんですかー。」さすがに反応にこまって棒読みになつてしまう。

「ところで、服は着ないんですか？」これで、着てくれれば部屋から追い出せるんだが…。

「いやー、別に着てもいいんだけどね、長官が着てないほうが男は

言うときいてくれるって言ってたからさ…。」

なんつーこと言うんだ。この顔でしかも上目遣い。確実にねらっている、この女。…そう分かっていてもかわいくて…。

「そ、そういうのはたまに見るから良いんだよ。見えないからいいんだ。見えないから見たくなるものなんだよ。だから服着ろ。おねがいだから。」

「うわっ、きもっ。なんか語りだした。」

「お前なー、俺は親切で言ってるの。だから、服着て。」

なんで見ず知らずの電波女にこんなこといわれなきゃなんないんだ。まったく、理不尽すぎる。

「じゃあ服貸せよ。」

……よく考えれば、服など持っていなかった。全部後で送られてくる予定になっている。服着ろと言っておきながらなんて…。十秒ぐらい俺は停止した。

すると女は、

「…そっぴやあんたの荷物、これしかなさそうだけど、服本当にもつてんの？ぷぷぷ。」

またバカにしゃがる。しかしそれは本当のことで、今日持ってきたのはお金とアレだけだ。他には何も…。

「後から運んでくる荷物の中にはいつてるんだよ。仕方ないから俺の服貸すよ。」

そっぴって上の服を脱いだ。

すると彼女は、「え、なんか、やだなー。」とほざきだした。

なんなんだ。腹立たしい女チャンピオンか。くそっ、王者の風格が漂ってるぜ。

「早くしろ。」俺はせかした。

「はいはい。着れば良いんでしょ。」

やはり服を着てもヤバい格好だ。外を歩いたら一発で捕まりそうだ。

「でさでさ、名前なんだったっけ??」

服を着た女は言ったしかも目を輝かせて。やっぱり可愛い。しかしム力つくことには変わらない。

「片桐祐太だ。」

「平凡すぎて覚えられないから、私が名前付けてあげる!」

とびつきの笑顔で言われた。こうなると、悪い予感しかない。

「じゃーねえ、”タニシ”なんてどう?」

なんで俺が、メダカだか金魚だかの水槽にはりついてるような生物の名前つけられなきゃなんねーんだ。

本当にこれからどうなるのか…。もうこの時点で一週間分の体力を使い果たした…。ような気がする。この腹立たしい女決定戦のチャンピオン(王者の風格ただよう)をどうすればいいんだ。俺の孤独な戦いは始まったばかりらしい。

ダンスから女（後書き）

お読みいただきありがとうございます（´、`）アリガト！
初めての作品です。ダメな部分もたくさんあると思いますが、それを言っていたけるとうれしいです。
ご意見、ご感想、まっけてます！

次回もよろしく願いします ニニニ（´、`）ニニニ ニニニ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361p/>

タンス少女

2011年1月8日20時07分発行